



キリスト者として生きる

現代社会の座標軸をもとめて

第7回

森本あんり

もりもと あんり
国際基督教大学教授

平和のシンボルとなった天皇

前回は靖国神社のことを書きました。「靖国問題」とくれば「天皇制」、と進むのがわたしたちの従来の連想です。天皇制も、語る人がそれぞれの心情や信条に大きく左右される問題です。日本に住むキリスト者なら、きつとどこかでこの問題にぶつかっていることでしょう。なかには、一貫して天皇制廃止を訴え続けている人々もあります。自分と意見の異なる人との対話を考えようとするなら、この問題も避けて通ることができないもの一つでしょう。

歴史的経緯を見れば、靖国と天皇との結びつきは明らかです。明治のはじめに「東京招魂社」として創建された時から、靖国は天皇と皇国のために戦って斃れた人々を弔い顕彰するための神社でありました。ところが最近この二つが必ずしもそう一直線にはつながっていないように思います。天皇の靖国親拝は、A級戦犯の合祀ごうしが明らかになって以来、この三〇年間は行われていません。靖国神社の方では、今でも強く参拝を願っていますが、八九年に即位した現在の天皇は、一度も参拝したことがありませんし、おそらく今後もしないのではないかと思います。

天皇制について云々することは、わたしもあまり気が進みません。先代の天皇については、どうしても否定的な感情が自分の中に泡立ってくるのを止めることができないからです。けれども、歳のせいでしょうか、現在の皇室には、少し違った見方ができるようにな

りました。

そのきっかけは、数年前に美智子皇后が「国際児童図書評議会」でされたヴィデオ講演です。美智子さんはそこで、小さい頃お母様に読み聞かせてもらった「でんでん虫のかなしみ」という新美南吉の童話に触れています。愛することは、悲しむことや犠牲を引き受けることと切っても切れない関係にある——少女はこの真実を幼い心に悟り、半世紀以上も経った後に、その思い出を語っています。このご婦人の人生には、戦後日本の辿った歴史が引き写しになっているように思えました。それ以来、現在の皇室は昭和時代とは違うのだな、と感じるようになり、ささくれ立っていた自分の気持ちと和らいでゆくようになりました。

ところで、この講演は「子供の本を通しての平和」と題されています。皇后だけではありません。ふと気がつく、今の日本で公人

天皇制について云々することはあまり気が進みません。

先代の天皇については、どうしても否定的な感情が

自分の中に泡立ってくるのを止めることができないからです。

けれども、歳のせいでしょうか、現在の皇室には、

少し違った見方ができるようになりました。

現在の皇室は昭和時代とは違うのだな、と感じるようになり、

ささくれ立っていた気持ちが和らいでゆくようになりました。

として機会あることにいちばんはつきりとは、「平和」と「反戦」への決意を語っているのは、皇室の人々なのではないか、と思います。

四年前のサッカー・ワールドカップ共催のときに、天皇は韓国についての感想を尋ねられて、こう発言しています。「桓武天皇の生母が百済の武寧王の子孫である、と続日本紀に記されていることに、韓国とのゆかりを感じています」。日本ではあまり報道されませんでした。韓国各紙は大騒ぎだったそうです。韓国の人々は、自分たちが日本人の「兄弟」であると思っていますから、この言葉は天皇がみずからそのことを認めたものと受け止められました。さらに、今年六月のサイパン島戦没者追悼では、韓国人慰霊塔へ立ち寄られ、しばしの黙礼を捧げています。予告な

しこのことで、多くを語らぬ中に、過去への反省と平和への強い決意を感じました。

昨年秋の「君が代」や「日の丸」強制論の最中には、東京都の教育委員に対して、天皇はご自身の口で「強制でない方が望ましい」と明言しています。きつとその筋の人々は、目を白黒させたことでしょう。今や攻守とくろを変え、日本の右傾化に歯止めをかけているのは、天皇なのです。総理大臣や都知事が国の内外で反発を買っている間に、皇室が平和と民主主義を守る大事な砦とりでになっているのです。

「いや、そういう思い込みこそ、まさに相手の思うつぼだ」と言われるかもしれませんが、個人の手柄の良さで、構造の欺瞞ごまかが隠蔽かくぺいされることもあるでしょう。さらに、こうしてい

つの間にか「平和のシンボル」となっている天皇ですが、この夏に出た加藤哲郎著『象徴天皇制の起源——アメリカの心理戦「日本計画」』（平凡社新書）によると、実はそれこそアメリカ軍が戦争開始直後から周到に用意した筋書きだった、ということでした。

なあんだ、結局これもアメリカさんの台本どおりか。そう言つて呆あきれ返ることもできません。でも、どんなに台本がよくても、役者が揃そろつて役どころになりきらなければ、よい芝居にはなりません。家庭教師がクエーカー信徒だった現天皇と、カトリックの正田家で育つた美智子さん、それに海外経験の豊かな皇太子夫妻——こういう人々が作る皇室には、戦後民主主義の思いがけない結果がありそうです。はじめは嘘うそくさくさでも、優れた上演が続けば、観客も成熟し、やがて脚本家の意図を越えた現実が生い育つてゆきます。だから、昨今のこの奇妙な「ねじれ」を、わたしは大切にしたいと思うのです。

それにしても、皇室からのこうした貴重な発言が伝えられると、どこぞの知事さんや右翼の人に、一度大声でどなつてみたい気がしますね。「不敬者ぶけいしや、畏れ多くも今上陛下いまじょうてんかがこのように仰せになつておられるのに、貴様はそのもつたたいないお言葉に逆らうつもりかあ！」なんて。

とても恐くてできないけど。